

【つながり & 共生】

多文化共生を実現しよう

【実践者】

氏 名	中村 陽美	学校名	埼玉県立特別支援学校塙保己一学園
担当教科等	家庭科・自立活動・総合的な探究の時間	対象学年（人数）	高等部普通科３年 教育課程Ⅰ（９名）
実践年月日もしくは期間（時数）	２０２４年９月 ～ １０月（５時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

総合的な探究の時間

02 単元名と単元目標

単元名：多文化共生を実現しよう

単元目標：共生の視点から文化祭の出し物について意見を出し合いながら考え直し、身近なところから行動を起こせることに気づく。自分たちの力で環境をよりよく変える経験から達成感を得て、自信につながる。

関連する学習指導要領上の目標：探究に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	世界には多様な価値観や文化があることを理解し、共生の捉え方を広げる。
② 思考・判断・表現	多様な文化や価値観、一人一人の幸せを尊重するために、自分（たち）には何ができるかを考えられる。
③ 主体的に学習に取り組む態度	課題に直面した際、自分（たち）の力で環境をよりよく変えられるよう行動を起こそうとする。

04 単元設定の理由・単元の意義

〈児童/生徒観〉

本授業に参加する生徒は、弱視５名、全盲３名、読み書き障害を有する１名であり、それぞれ拡大文字、点字、音声を使用して学習に臨んでいる。「視覚障害は情報障害」という言葉に表されるように得られる情報が限られることや、他者から支援をしてもらうことが多く生活経験が少ないことから、知らない世界を恐れ自分の安心できる環境に留まりたいという気持ちがある。夏休み前、「将来留学を希望するか」という調査が行われたが、希望者は０名、希望しない理由からは、知らない世界への恐怖や海外への

興味の低さがみられた。また、障害を悲観的に捉え自分の希望があっても実現が困難な場合、解決方法を粘って考えることなく諦めてしまうことがある。和気藹々とした学年だが、話し合い活動において、意見をしない生徒や他者の意見を聞き入れない生徒などがおり、様々な人の意見を取り入れながら進めることは難しい。話し合いを円滑に進められるよう、生徒たち自身も模索しているところである。

〈指導観〉

自分たちの世界を広げ、課題に多角的に向き合って行動を起こし、自身の願いを叶えていきいきとした人生を歩んでいけるような力を育みたい。本単元では、まず知らない世界に触れて視野を広げ、共生の捉え方を広げる。そのうえで、個人単位での共生について思いを巡らせ、自分にできることは何かを考える。そして、共生の視点から文化祭の出し物について考え直す活動を行い、自分たちの力で環境をよりよく変える経験から達成感を得て自信に結びつけていってほしい。文化祭後には振り返りを行い、目標達成の楽しさ・難しさを感じることで、未来のPDCAサイクルへつなげる。将来何か困難に直面した際、自分には何ができるかを考えながら、他者と協力し行動を起こすことのできる素養を高めていきたい。

05 単元計画（全5時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動
1	知らない世界に触れよう	知らない世界に目を向け、自分たちの当たり前を疑い、視野を広げる。	・宇宙人に地球の生活を紹介 ・パラグアイ紹介（地理、衣食住、学校事情） ・パラグアイ体験（チピータ・テレレ試食試飲）
	資料・教材など ・点字地球儀・日本が東にある世界地図・日本が真ん中にある世界地図 ・衣食住や学校事情がわかる写真・動画・音声・アオポイ、テイポイ（教員2名で着用して授業をした）・グアラニー族の民芸品（楽器、木彫り）・ニャンドゥティ・チピータ・テレレのセット		
2	「共生」の意味を考えてみよう	共生の捉え方を広げ、国際的な視点を持つ。身近な生活の中にも外国とのつながりがあることに気づき、人々の想いに触れることで多様な文化や価値観を尊重できるようになる。	・パラグアイの日系社会〈＝外国の中の日本〉を紹介 ・日本で暮らす外国人（フィリピンから移住した生徒の母へインタビュー）〈＝日本の中の外国〉について考える ・国際的な視点から、共生のために私たちができることを考える
	資料・教材など ・前時を振り返るパワーポイント・移住の歴史の紹介・エリカさんへのインタビュー記録 ・日本人会表敬の記録・ホームステイでの記録・イグアス日本語学校での動画、子どもたちとの会話・生徒の母（フィリピン出身）へのインタビュー		
3	個人単位の共生を考えよう	年齢や性別、障害、国といったジャンルだけではなく、その中の一人一人に対して自分が個人としてどう向き合っていくかという個人単位での共生の視点に立	・「友情の日」の体験 ・パラグアイ人のお金の考え方を紹介 ・自分が大切にしていることを考え、共有 ・エリカさんが通訳になった理由を紹介 ・視覚障害者（JICAパラグアイ福地さん・本校英語担当中川教諭）の仕事の工夫を紹介

		つ。一人一人の幸せを尊重することの大切さに心を向け、そのために自分ができる行動を考える。	・共生のために自分ができることを考える
	資料・教材など ・前時までを振り返るパワーポイント・「友情の日」体験のための名前の書いたくじ引き ・エリカさんへのインタビューの音声（通訳になった理由）・福地さんへのインタビューの動画（仕事の工夫）・本校英語担当中川教諭へインタビュー（仕事の工夫）		
4 本時	文化祭での共生を実現しよう	共生の視点から文化祭の出し物について意見を出し合いながら考え直し、身近なところから行動を起こせることに気づく。自分たちの力で環境をよりよく変える経験から達成感を得て、自信につなげる。	・前時までの振り返り（共生の意味の広がりを出し出す） ・すべての人が楽しめる文化祭の出し物をつくるための工夫を考える ・改良・発展させるための文化祭準備
	資料・教材など ・前時までを振り返るパワーポイント		
5	文化祭を振り返ろう	自分たちの気づきや来校者からの意見からフィードバックを行い、目標達成の楽しさ・難しさを感じることで、未来のPDCAサイクルへつなげる。	・文化祭の振り返り（経験・気づきの共有、来校者からのフィードバック紹介、もう一度文化祭ができるならどう臨みたいかを考える） ・共生のために私たちができることを考える
	資料・教材など ・前時までを振り返るパワーポイント・文化祭で生徒たちが共生のために工夫したものや行動の写真・来校者（教師海外研修の仲間）のフィードバックの紹介		

06 本時の展開（4 時間目）

本時のねらい：共生の視点から文化祭の出し物について意見を出し合いながら考え直し、身近なところから行動を起こせることに気づく。自分たちの力で環境をよりよく変える経験から達成感を得て、自信につなげる。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 (20分)	●前時までの復習をする。 ・パラグアイの衣食住や学校事情を知り、世界を広げる ・外国の中の日本、日本の中の外国を知り、国際的な視点で共生を考える ・「友情の日」体験（前時欠席者が発表） ・エリカさんが通訳になった理由 ・JICA パラグアイ福地さんの仕事の工夫	◇前時までに学習した内容を振り返り、生徒たちが気づきを思い出せるようにする。 ＊音声中心の情報を提示し、視覚情報は説明を補足する。

	・本校英語担当中川先生の仕事の工夫 ・共生のために自分にできることを考える ●本時の学習のテーマを知る。 本時の学習テーマ：すべての人が楽しめる文化祭をつくろう！	◇自分たちが近日中にできそうなことを問う。
展開 (20分)	●すべての人が楽しめる文化祭の出し物をつくるための工夫を考える。 ○「すべての人」にはどんな人がいるか挙げる。 ○すでにしている工夫を挙げる。 ・各ゲーム担当で話し合い、メモをとり（※）、全体に共有する。 ○今からできそうな工夫を考える。 ・各ゲーム担当で話し合い、メモをとり（※）、全体に共有する。 ・他のゲーム担当とアイデアやアドバイスを交わす。	◇老若男女、障害の有無など様々な来校者、ゲームの主催者の自分たちなど多くの人々のことを思い浮かべられるようにする。 ◇メモを残し、文化祭後のフィードバックで活用できるようにする。 （※時間が足りず当日は行わなかった。） ◇自分の担当以外のゲームについて考えたり意見交換したりすることで、新たな視点を得られることに気づけるようにする。
まとめ (5分)	●文化祭への意気込みを発表する。	◇共生という視点を加えて文化祭について考え直したことに触れる。

使用する資料・教材：前時までを振り返るパワーポイント

07 板書計画

PPT を使用

08 評価規準に基づく本時の評価方法

発言内容・活動中の様子

09 学校外との連携（※該当のある場合）

教師海外研修中に通訳のエリカさん・JICA 職員の福地さんへインタビューをした。

10 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

・夏休み前の「将来留学を希望するか」という調査で希望者は0名だったが、渡航後の初回の授業で経験を紹介すると「海外行きたい!」と話していた。国際的な視点で自分ができていることを考えた際にも「留学」と答える生徒がいた。少しずつ海外にポジティブな印象を持っていた。

・「友情の日」の体験でとてもあたたかな雰囲気になり、その日の帰りの会で生徒が「卒業式の後にもやろうよ!」と言ってくれた。それぞれが級友を思い合えるいい機会になった。

・本時の「すべての人が楽しめる文化祭」の「すべての人」にどんな人がいるかの問いに「国籍」という言葉が出てきて驚いた。

・異なる立場を想像することや立場の置き換えが苦手な生徒たちだが、どんな来校者が来るかなど様々な場合を想定して文化祭の出し物の工夫を考えられていた。

・文化祭の出し物が自分たちの工夫によって、色んな方に楽しんでもらえたことを実感していた。事前の工夫だけでなく、その場での臨機応変な対応の大切さに気づいていた（床に置いていたおぼけ釣りの桶がベビーカーから届かなかったため持ち上げたことなど）。文化祭後のフィードバックの際、当日はいらっしゃらなかったが、「音声を使った謎解きは聴覚障害のある方が来たら対応できていなかった」と悔しがっていた。想定を広げて共生について考えられるようになり、成長がみられた。

11 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

- ・日本にとどまらず、海外にもっと目を向け、世界を広げてほしい。
- ・国際協力の大切さ。日本は日本だけの力では成り立たない。
- ・日本から離れたところに、日本に想いを馳せる人たちがいる。
- ・情報を鵜呑みにせず、物事の光と影をみつめながら多角的に考えてほしい。
- ・共に学ぶ仲間がいることで、新たな発見、考えの厚み、学びあう楽しさを得られる。

12 苦労した点

「共生のために自分に何ができるか」といった問いを単元の中で何度かしたが、現在の生活では自分と海外とのつながりが少なく、国際的な視点においては思考が止まることがあった。学習前より地球規模での視野を広げられていたが、小さなことからでも行動に移せることを実感してもらうのが難しかった。「“文化祭ですべての人に楽しんでもらうために”何ができるか」といった場面を設定した具体的な質問をすると考えが浮かびやすかった。場面を自ら設定する自由な質問と場面を与える質問どちらも入れていく必要性を感じた。

13 改善点

「苦労した点」に記載。

14 成果が出た点

- ・海外に興味を持ってくれたこと
- ・世界には多様な価値観や文化があることを理解し、共生の捉え方を広げられたこと
- ・自分たちの力で環境をよりよく変えられることに気づき、さらなる工夫を考えられたこと

15 自由記述

【研究協議会 参加者の声】

(一緒に授業に入っていた本校教諭)

・異なる立場を想像することや立場の置き換えが苦手な生徒たちだが、体験をしながら共生について学ぶことができた。いつも後ろに座る生徒も前に座っていた。

(本校教頭)

・最初、JICA 研修に参加すると聞いた時は驚いた。バイタリティーがあり、熱い思いがあるため、いい機会になったのでは。本時では復習に凝縮されていて、新たな視点を伝えたいということがよく伝わった。「友情の日」の体験は、生徒が非常に生き生きとしていてよかった。視覚障害に対する工夫に発想が向かうのは本校では当たり前のことではあるが、国際視点の入った話が出てきたのは大きな一歩。

(JICA スタッフの方々・研修の仲間)

・盲学校初めて。目が見えないけど、「友情の日」のいいところ紹介で、よく友達のことがわかっていると思った。

・福地さんのお話が大切だと思った。自分が貢献できることをやると気づいたうえの本時で、生徒が一歩進んだ。研修最終日にギリギリだったが、福地さんにインタビューできてよかった。

・普通の学校でここまで出ない。盲学校だからこそ幅広い視野で考えられるのでは。障害+国際的な視点で視野が広がった授業になっていた。

・多様性=外国人になりがちだが、子どもたちが文化祭での様々な想定を想像できていた。

・生徒が、障害や国籍、色んな人の立場に立って、共生を意識して文化祭準備に挑もうとしている姿がとても素敵。文化祭当日、どんな形になっているか楽しみ。

・文化祭の出し物を一からではなく、新たな視点を得たうえでブラッシュアップしよう、という展開がよかった。生徒がつまんだところを先生たちがフォローや声掛けすることで進んでいた。

・クラスを見て、ユニバーサルではなく、インクルーシブだと思った。

・授業の導入から学ぶことが多かった。音からダム、何色で食事など、音や色で入るのが斬新。五感で学ぶことが大事と思いつつ、資料の活用はどうしても視覚に訴えるものがほとんどだったと改めて感じた。言葉で情景をさらさら伝えていて、視覚を活用しない伝え方に驚いた。

・パラグアイで学んできた視点も入りながら、それを使って思考させるという展開がよかった。

・お茶を淹れるのを生徒同士で協力したから、テレレの体験をよく覚えていたのかな。

・「聴覚障害」をもった方のための工夫が出てきたことにびっくり。なんで意識がそこまでいったんだろう。陽美先生（授業者）が手話を勉強しているから？子どもたちにとって周りの影響は非常に大きいと思った。

・先生と生徒が対等な関係に見えたのが本当に素敵だった。

・色んな人と交流してほしい。新島と近しいのでは。

【文化祭に来てくださった研修仲間の声】

・人生で初めて盲学校に入った。廊下にはたくさんの点字と墨字の掲示物があり、ここでは目の見える私にバリアフリーとして墨字があるのだと感じた。もしかしたら目が見えないのが普通で、目が見えるのが特別なのかと思った。

・どのブースも、点字、墨字が用意されていて、私たちも不自由なく過ごせた。

・いろんな作品も見られて、先生方が生徒に与える教材、課題の工夫も感じることもできた。

・私のクラスでは、ハロウィンパーティーを企画中だったから、レベルの高い出展にアイデアをいただいた。子どもたちに紹介したい。

・ピアノ発表の最初の挨拶に英語を入れていたことは、授業あつての工夫だと思った。

・話題の射的は、結局ペットボトルの中は水になっていて、水の量によって倒れるかどうか工夫されていておもしろかった。ボールがカラカラ音がする物で、ペットボトルの音ではなくて、ボールの音で分かる工夫がされていた。

・触覚を活用する謎解きは、見えている人も、見えない工夫がされていて、誰でも楽しめる内容。視覚障害の方が得意なのかなと思い面白かった。こんなにもわからないものかと驚いた。手指の感覚をどれだけ活用していないか実感した。

・磁石で釣るゲームですが、お店屋さんがかなり頑張って墨字を読んでいたイメージだった。あの空間は視覚障害の方が普通、障害がない私たちが特別な空間だと感じたので、もっと店員さんがやりやすい形で良いと思った。